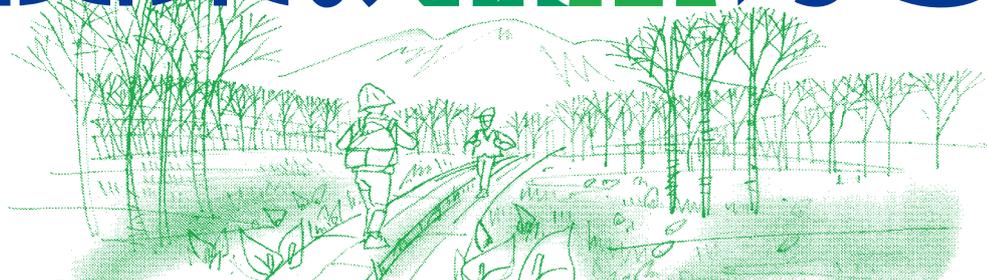


平成20年 8月 1日

第53号

# 関東の森林から



国民の森林・国有林

関東森林管理局

前橋市岩神町4-16-25

TEL (027)210-1158

FAX (027)210-1159

<http://www.kanto.kokuyurin.go.jp/>



東京に向かう定期船「おがさわら丸」を見送る島の人達  
(東京都小笠原村父島)  
〔おがさわら丸〕からの撮影：東京事務所 小野寺 秀夫

## 美しい森林づくり

「国民の森林」クリーン活動

国有林野管理課課長補佐 森内 賀久

## 私の視点

「緑・人を育む」

地球緑化センター 山と緑の協力隊事業部 杉本 静佳氏



広報「関東の森林から」は、日本の森林を育てるため間伐材を使用しています。

### トピック1

吾妻森林管理署では、昨年7月31日に群馬県嬭恋村のパノラマラインの清掃作業で、嬭恋村、林業業者の協力の下、2トントラック2台、軽四3台、ワゴン車1台分のゴミを収集した。



斜面に散乱するゴミを一つずつ片付ける(吾妻署)

林野庁では毎年7月を「国民の森林」クリーン月間に設定し、管内各地の国有林で、森林管理署等の呼びかけで、地元市町村、地域住民、ボ

## 「国民の森林」クリーン活動

国有林野管理課課長補佐 森内 賀久



ランティア団体、観光協会、土木業者等と連携し、不法投棄の一掃を目指してクリーン活動や県の不法投棄対策担当者を講師とした勉強会などを実施しています。

不法投棄は特に公道の待避場などの空き地付近や林道入口付近などに多く見られます。対策として、違法行為防止の看板等の設置をしましたが、設置した側から捨てられる等、モラルの低下が数多く見られます。

地道に一箇所ずつ片付けていくしか方法はありませんが、ほとんどの箇所は山の急斜面、機械もあまり使用できず手作業での重労働にたよるほかありま

### トピック2

塩那森林管理署では、昨年7月12日、那須塩原市塩原地区の県道下塩原一矢板線沿いの清掃作業で、那須塩原市、塩原観光緑化推進協議会、塩原温泉パークコンダクター連絡協議会、国有林野保護監視員の皆様の協力の下、トラック2台分2.1トンのゴミを収集した。

トラックに集められたゴミの山(塩那署)



道路下のゴミをクレーンでつり上げる(塩那署)

回収したゴミの内容を見ると、空き缶、ペットボトル、大型家電、布団、雑誌、タイヤ、タンス、乗用車、パチンコ台、コンクリートブロック、犬小屋、油性塗料などありとあらゆるものが捨てられています。また大半は一般家庭から出たゴミと思われる。昨年度実施した結果では、見つかった不法投棄箇所が276箇所。その

うちクリーン活動で片付けられたのは41箇所、残りは業者への委託等で片付けたものもありますが、人力では処理できず手つかずのままという状態もあるのが現状です。指定場所に捨てるとか、粗大ゴミで処理すればすむものをわざわざ自分で山奥に持ち込み、森林の中に捨てていく人の気が知れません。森は水源であり、森が荒れば下流の安全が壊されることにつながります。不法投棄は犯罪です。絶対に止めてほしいと強く願います。

### トピック3

太平洋の孤島小笠原諸島(海岸の大部分も国有林)には様々なゴミが流れ着く。中には外来種の種子も含まれている可能性があり、これらは地元NPOと協力し片付けている。



父島初寝浦の砂浜に流れ着いたゴミ。砂浜についている2本の筋はアオウミガメが産卵のため上陸した跡(小笠原村)



# 赤谷プロジェクト近況報告

## ほ乳類モニタリングワーキンググループの開催

6月26日(木)に利根沼田森林管理署会議室において、ほ乳類モニタリングワーキンググループが開催され、平成20年度調査の枠組みや調査項目について話し合いを行いました。

その中で、どのような森林をつくれれば、多様な動物種が適正な数で適正な関係を保ちながら生息できるかについて議論しました。

また、本年度新たに行う調査として、センサーカメラ約50台を用いた、赤谷全域のほ乳類の分布調査を行うことになりました。

この調査では、赤谷全域のほ乳類相を明らかにすること、同一地点にセンサーカメラを設置することによって、ほ乳類相の季節および経年変化を把握することを目的としています。

さらに、これらのデータを用いて各ほ乳類がどのような環境を好むか、各ほ乳類の潜在的な分布域はどの程度の広がりをもつかなども検討する予定です。

例えば、ツキノワグマなら、森林の状況が人工林か天然林か、森林の傾斜や日当たりの程度などの多くの環境因子を組み合わせることにより、その森林における潜在的なツキノワグマの分布状況を推定する手法が提示されました。

今後も専門家の意見を交えて、どのような森林が動物にとって棲みやすいかについて、検討を進めていきたいと考えています。



ほ乳類の生息に適した森づくりについて、専門家を交えて意見交換

## 森林ふれあい実務研修の実施

7月2日(水)～4日(金)に平成20年度森林ふれあい実務研修を各署の森林ふれあい業務担当者や森林官を対象に実施しました。センター職員から「いきもの村」で赤谷プロジェクトの解説や、現地のカラマツ漸伐試験地で植生復元モニタリングの説明やホンドテンのモニタリングの実習などを行いました。

また、赤谷センターでは環境教育プログラム作成に取り組んでいますが、この機会を利用して、各署における環境教育の取組についても意見交換を行い、今後の参考としていきたいと考えています。



カラマツ漸伐試験地で植生復元モニタリングについて解説

## 南ヶ谷(なんがや)湿原の調査



モリアオガエルの卵塊

南ヶ谷林道の大峰山西側付近には、「南ヶ谷湿原」と通称している湿原があります。

「赤谷の森」では湿原は珍しく、湿原独特の植物や昆虫類が存在する可能性があります。また、地質の専門家によると湿原周辺はいわゆる「地すべり地形」であり、学術的にも防災の面からも研究対象となりうるということです。

7月の「赤谷の日」では、モリアオガエルの産卵状況を中心に調査を行いました。湿原を一周し、目測で卵塊の数をカウントしていったところ、モリアオガエルの卵塊は計114個発見され、昨年の同時期に比べるとやや増加していました。地上から5メートル以上の高木の枝先に産みつけられているケースもあり、モリアオガエルの逞しさに感心したところでした。

また、夏に日本で繁殖し、秋に南西諸島や台湾に渡っていくと言われていたアサギマダラの1個体を捕獲し、マーキングして放蝶し、追跡調査を行うこととしました。

今後も、継続的に南ヶ谷湿原の植生や生息している動物や昆虫類を調査し、学術的な価値や環境教育の場としての可能性を探っていきたいと考えています。



ギンリョウソウが沢山咲いていました

# 各署便り

## 二十年以上の

### 森林整備に感謝

**下越署** 毎年恒例となっている、新潟県敬和学園高等学校二年生（総勢50名）による森林整備活動が、今年も5月13日（火）に実施されました。

マイクロバス二台に乘車し、思いの服装で集合した生徒は、ヘルメット、手袋、ノコギリの出で立ちで「森林整備」に挑戦。

地元の中条森林事務所森林官から作業前の注意事項や作業内容の説明を受けた後、良く切れるノコギリ？を片手に、力の限り切りまくり、最初は悪戦苦闘していましたが、だんだんコツをつかみ無事予定区域を完了。



切れるのこぎり？

昼食では学校が用意した豚汁をすすってエネルギーを回復し、昼休みには、疲れた署員を尻目に、余り余るエネルギーを川遊びに没頭して、長靴を川に流して急遽別の長靴を用意する一場面も。

最後はさすがに疲れた様子でしたが、生徒代表から、「先輩達が整備してきた森林を見て感激しました。とてもきつかったけど楽しかったです。」と挨拶をいただき、立派になった林を後に帰路につきました。

敬和学園高校は、昭和60年の植樹をかわりに、今年で二十有余年間の熱意と行動に対し、5月23日に署長から越後スギで作成した感謝状を呈呈いたしました。

（流域管理調整官 富樫仁栄）

## 赤谷との連携による 「事前森林教室」実施

**千葉所** 5月21日（水）、千葉市立白井中学校で、今年度第1回目の森林教室を実施しました。

参加した二年生38名は、6月に赤谷での自然環境教育活動（いきもの村自然体験学習）を全員で体験する予定であり、当所では平成18年度から、千葉市の中学校を対象に、「赤谷での自然体験の事前学習」という位置付けで、赤谷森林環境保全ふれあいセンター及び利根沼田森林管理署



小枝エンピツ作り実演中

と連携した森林教室を実施しています。

森林教室の1時限目は、ビデオとスライドを使って、気候と標高によって違う森林の姿や暮らしを守る森林の働き等について、2時限目は、丸太切りと小枝のエンピツ及びモックンキーホルダー作りを体験してもらいました。

エンピツ工作は、ナイフで削る、鋸で切る、ヒートンをつけるという木工の基本作業が一通りできるので、当所の木工教室でよく紹介しています。

生徒達は技術の授業で鋸を使うことはあっても、ナイフには不慣れとのこと、枝を削る作業に苦戦しつつも楽しんで作業していました。

生徒の皆さんには、今回の森林教室のことを思い出しながら、いきもの村での自然体験を楽しんで来て欲しいと思います。（主幹 大野亜樹子）

## 天竜林業高校生、 職場体験！

**天竜署** 6月4日（水）～6日（金）の三日間にわたり、当署において静岡県立天竜林業高校男子生徒3名が職場体験実習を行いました。

一日目は、署内で国有林野事業の概要、治山・林道等各種事業について学習しました。

二日目は、天竜美林で有名な龍山町瀬尻国有林の間伐箇所において、輪尺（木の太さを測るための用具）や測竿（木の高さを測るための用具）などを使用した調査に取り組んだ後、今年度伐採予定の50年生のスギ林を見学しましたが、実習生から「調査した間伐箇所と違い、木が太く悠然とした姿はすばらしい。」との声がかれました。

最終日となる三日目は、水窪国有



首席森林官から調査用具の使用方法を学ぶ実習生



森のハンガー&ドリームキャッチャー

**森の恵みで暮らしを飾ろう！  
クラフト体験Ⅰ開催**

「高尾森林センター」6月10日(火)、当センターの新規公募イベント「森の恵みでクラフト体験Ⅰ」を、7名の参加により開催しました。

林において、スギを伐採し丸太の生産をしている現場を見学した後、首席森林官から森林の蓄積の調査について説明を受け、Kスケールを利用する方法や親指を利用する方法などについて懸命に取り組んでいました。実習生から、今回の職場体験実習を通じて「将来の夢や、間近に迫った進路の選択について真剣に考えるようになった。」との感想もあり、三日間にわたる体験実習を有意義に終了することができました。  
(業務第一課長 寺田英司)

はじめに先生(森林インストラクター東京会 四反田有弘氏)が「日本の森林の間伐の必要性、暮らしの中で、いろいろな物に木材を取り入れよう」と話され、工作の指導に入られました。

「森のハンガー」は、ヤマザクラなど、30センチ程の長さの横木に木の実や種で動物の形など、思い思いに飾りつけました。

「ドリームキャッチャー」は、ネイティブ・アメリカンの人々に伝わるお守りで、悪夢は網と羽に絡め取られて、良い夢だけが届けられるというロマン溢れるものです。ミズキの枝を骨組にし、正六角形などの形に草木染めの毛糸を巻き、枝先には鳥の羽を飾りました。作品は壁に飾って鑑賞し、参加者からは「作品はいつまでも手に残り、生活に潤いがある。」「間伐材の利用方法をもっと知りたい。」などの感想をいただきました。  
(緑化第一係長 勝川 誠)

**「虫がいるから森は嫌い!」  
もーこの始まり?!**

「山梨所」梅雨を控えた6月4日(水)、「北中学校遊々の森」活動が実施されました。毎年3回程度、地域の人達を講師に招きながら、遊々の森まで徒歩15分という地の利を生かし、学校独自の森林環境教育を展開しています。



森林インストラクターによる自然観察

中学生になると、はずかしさもあがり、この手の活動はちよつと斜に構えるお年頃。「キャー!ムシ〜!」と大騒ぎする子供もいれば、講師の話や夢中でメモする子供まで様々です。何をやるかはその子供次第ですが、何事も経験しなければ始まりません。子供の成長も森林の成長も、すぐに効果の現れる手法はありませんが、子どもの視点に合わせたプログラムを提供し、活動を継続させることが大切だと感じました。  
(主幹 平野辰典)

**市場価値の  
より高い間伐材を!!**

「塩那署」当署では6月9日(月)、大田原市内の間伐事業地において、「平成20年度造材現地検討会」を開催しました。

検討会には、栃木県、大田原市、益子町の林業行政担当者、県北の森林組合・林業事業体、製材工場など57名が参加しました。検討会では、参加者が20班に分かれ、用意した10本の試供木(全幹木)の採材パターン(木どり)を検討し、その結果を班ごとに取りまとめました。

次に、各班の野帳をパソコンに入力し、試供木ごとに①は最も多くの班が選んだ採材パターン、②は販売見込価格が最も高い採材パターン、③は②とは逆に、販売見込価格が最も低い採材パターンをただちに集計しました。

現地にはパソコンのほか発電機とプリンタを持ち込み、集計結果を印刷し参加者に配布した上で、試供木のうち2本を②の採材パターンにしたがって実際に玉切りし、径級、曲



木どりを行う参加者



指導を受けつつ植付体験

**磐城警署** 6月19日(木)、当署管内の国有林において、福島県立勿来工業高校建築科の一年生38名が植付を行いました。  
同校は、平成19年度に「目指せスペシャリスト」研究開発校として文部科学省の指定を受け、建築科では、風土に適した建築材料として木材を研究課題としており、植付から流通、

### 建築科高校生が植付を体験

(流域管理調整官 藤原孝吉)

加工、さらには廃材利用までの「木の一生」を学ぶための一環として体験学習を実施したものです。  
当日は、福島県が認定する指導林業者「ふくしまグリーンフォレスト」の小林正美氏らから指導を受け、8班に分かれて、一人約20本のスギ苗木を丁寧に植え付けました。  
その後、当署長が火力発電所で燃料として使用されている石炭の実物を示しながら、地球温暖化防止に果たす森林の役割や炭素の循環等について説明すると、生徒達は熱心に聞き入っていました。  
今後、生徒達は、木材の生産現場、製材所、建築現場、廃材を利用した木質バイオマス施設等も視察して、木材についての理解を深めることとされています。  
(流域管理調整官 大森喜二)

### 中国人留学生が森林整備作業を体験

(流域管理調整官 大森喜二)

**宮妻署** 6月21日(土)、小雨降る中、今年で3回目となる中国人留学生による林業体験が行われました。  
今回、草津に来た35名の留学生は、中国の大学を卒業し、日本の大学院を目指して日本語の勉強をしており、日本の自然や文化を知り交流を図る一環として、「草津やすらぎの森」で森林整備作業を体験しました。  
当署からは、署長等が指導に当た



木工クラフトに挑戦

(草津森林事務所 片桐奈津美)

り、安全な作業と、森林の持つ素晴らしさを伝えました。  
参加した留学生たちは、手鋸の使用や、森林に入ってから作業が初めてということもあり、作業前に実演講習をしてから、各班に分かれて作業しました。  
伐採する際には、大きな掛け声で「倒れるよー!!」と合図し、伐採するたびに歓声が上がリ、森林整備を通して森林を育てることの大切さを学んでいました。  
雨天のため、森林整備の体験を早めに切り上げ、草津森林事務所に移動して木工クラフトも体験しました。  
ダケカンバの枝などを使い、ブローチやモックンなど、自分だけのオリジナル作品を作り上げると、出来上がった自慢の作品を仲間と見せ合うなど楽しんでいました。

### 災害ゼロを願う

安全週間初日の7月1日(火)、災害ゼロの願いを込め、局長、部長による安全旗の掲揚と局幹部職員によるゼロ災コールを行いました。

今年度の国有林野事業安全週間のスローガン「気づいたら迷わずかける一言が 無災害へつづく道」の下、災害ゼロを目指し決意を新たにしました。  
(職員厚生課)



安全を誓い安全旗の掲揚

# 森林官からのおたより

中越森林管理署 倉俣森林事務所

森林官 西梅 正太郎

私の勤務している森林事務所は、新潟県南部の日本一の大河である信濃川が流れる十日町市に位置しており、平均積雪量は2メートルを超え、全国有数の豪雪地帯となっています。

管内は、十日町市、津南町にまたがる国有林9,687ヘクタール、官行造林地（契約により国が民有地に植林した所）152ヘクタールを有しています。

その大半を天然林が占め、ブナやミズナラが美しく、春の新緑から冬のスキーと観光客から地元の人々にも親しまれている当間山や、日本一と言われる河岸段丘を形成し信濃川



雄大な景観美を誇る「清津峡」



無数の池塘が点在する「小松原湿原」

に流れ込む志久見川・中津川・清津川の上流域、小松原などを管理しています。

国有林内には多数の観光スポットがあり、国指定の名勝および天然記念物になっている「清津峡」は500万年前のマグマが柱状節理になり、それが隆起と川の浸食によって雄大な景観美を形成しています。

また、「森の巨人たち100選」に選ばれている「見倉の大栃」は、推定樹齢500年、幹周り848センチを誇る秋山郷の大自然を象徴するような大木です。

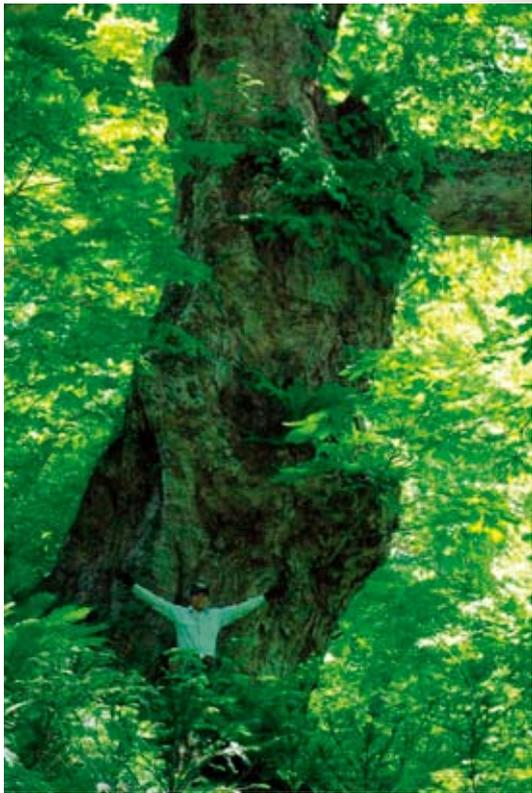
ここでは毎年、歩道の刈り払いや保護ロープの設置など、地元と国有林が一体となって保護活動に取り組んでいます。

さらに、「小松原湿原」は新潟県自然環境保全地域に指定されており、標高1,500メートルほどの緩やかな斜面に「池塘」と呼ばれる無数の小さな池が点在し、「わたすげ」などの高山植物が登山者の目を楽しませてくれます。

このように国有林内には数多くの名勝地がありますが、近年、入山者のマナーの低下が問題となつています。そこで、地元自治体や登山会などボランティアの協力を得て、清掃登山など積極的に進めています。

このようなボランティアの方々の姿から入山者の意識の向上が図れば良いと思います。

豪雪地帯の事務所で一年の3分の1以上が降積雪期間となり、春から秋は集中して外業に取り組んでいます。



推定樹齢500年の「見倉の大栃」

最近では、前述した官行造林地の約半数で地元から持分譲渡の要望が出ており、その調査に追われています。昭和初期に設定されたため、契約者である地元の方も行ったことがない山がほとんどで、官行造林地の場所もそこに行く道も分からないような状態から始めるのは大変苦労します。しかし、地図と空中写真を頼りに林道や森の中を探し回るのは、宝探しをやっているようで子供の頃に帰った気がします。

当事務所に限らず近隣の事務所でも一人森林官であることから、隣接の森林官と連携を取って業務を進め、先輩方から引き継いだ国有林を停滞させることなく、次の世代へ繋いでいかなければならないと思つています。

# 私の視点 「緑・人を育む」

地球緑化センター 山と緑の協力隊事業部 杉本 静佳

地球緑化センター（以下GEC）は緑のボランティアを育て応援する団体です。個人やグループを始め、行政、企業、教育機関など、様々な人たちを対象に、多彩な支援をしています。体験、実践などのプログラムを提供し、活動に関する相談、助言、広報などを通じて、一人ひとりの緑に対する意識を育む事業を実施しています。

そのひとつ、「山と緑の協力隊」事業は、国有林及び自治体林を活動の場とし、その土地が必要としていることを行う市民参加による森づく



箱根姥子にて

りを96年よりスタートしました。首都圏をはじめ幅広い地域からの参加者によって熱心に活動が進められ、参加者はすでに10,000人を超え、フィールドは目下全国12か所に広がっています。参加者のほとんどが50、60代の方で、元気に活動されています。私が何より魅力的に感じるのが、この参加者の方々で、お年を召しているので大丈夫かな？という私の心配をよそに、ヘルメット



写真右が著者



湘南海岸林ボランティアでの草刈り風景

を強く感じました。ある参加者が「私はGECの事務局長、事務局次長の人柄に惚れて、今の活動を続けています。その2人が選んだ職員もま

を被り鉦と鋸を身につけ山を歩き回る姿は大変格好良く、一人で大きな木を倒したり、私が困っていると手伝ってくれたり、その熱心さと頼もしさに惚れ惚れしてしまいます。活動が終わってへとへとかと思うと、「これがあるからやめられない」とビールをぐびぐび飲んでは仲間達と語り合う、そんな皆さんの生き生きとした顔が、私には少年のように映ります。私一人では出来ないことでも、ボランティアの方々がいるからこそやり遂げられることを経験し、どれだけ救われ、前向きに頑張ろうと思えたことか。GECはそんな参加者の方々に支えられて存在していることを強く感じました。



囲炉裏を囲んでの森林教室



箱根姥子での小学生との植樹体験

その地域に根差した活動がなされています。これからも、GECでの活動がきっかけとなり、新たな緑のグループが次々に生まれていくことを願っています。人の魅力の詰まったGECの森林ボランティアにぜひ参加してみませんか？森林ボランティアの年間予定はホームページをご覧ください。  
<http://www.n-gec.org>

た魅力があるから関わっていきなさいと思う」と話してくれました。お互いがお互いを認め合い、高め合う関係がそこにあることを感じました。そんな森林ボランティア参加者の中から長年の経験を積んだ方々が中心となって各地に活動拠点が生まれ、現在12のグループで、

平成20年度

安全管理担当者会議を

開催

平成20年度安全管理担当者会議が6月25日(水)、26日(木)の2日間にわたり関東森林管理局において開催されました。

この会議は、管内各署等の安全管理のリーダーである主任安全管理者等が出席し、安全に関する実践的な知識の習得と指導力の向上を目的に毎年度行われています。

初日は、会議に先立ち安全表彰が行われ、3年間無災害を記録し安全優良賞に輝いた吾妻森林管理署に、局長から表彰状と副賞が授与されました。

続いて会議では、外部講師を招いて「管理監督者が進める心の健康づ



外部講師による「心の健康づくり」講習会

くりについて」と題し講習会が開催され、日常の業務の中で直接職員と接する立場での心の健康づくりについて実践的な講話を受けました。

出席者からは、心の病について悩みを抱えている人が増えており、是非参考にしたいとの感想がありました。

た。

翌日の会議では、冒頭、総務部長から、「第8次関東森林管理局労働災害防止対策要綱」等の策定を受けて、安全管理体制の機能の活性化、安全で正しい作業方法の徹底など適切な安全管理の積極的推進について説示がありました。

続いて意見交換が行われ、昨年度の公務災害は歩行中の転倒等によるものが多かったこと、また、車両による災害が、物損事故を含めて多発傾向にあることから、行動災害及び交通事故の防止対策を中心に、各署等における課題と対策について、積極的な意見交換や独自の取組について紹介等がありました。

特に、行動災害の防止に関しては、作業環境、危険因子の事前把握と安全の先取り活動の推進、安全意識の

高揚策等について、また、交通事故防止については、ゆとりある運転、道路状況に応じた運転、運転技能講習の実施、防衛運転等について積極的な意見交換が行われました。

(職員厚生課)



安全表彰を受ける吾妻署

一枚の写真



吾妻連山荒川源流の「幕滝」

福島・山形両県境に位置し、福島県を代表する吾妻連山を源とした荒川源流部にある幕滝です。

この滝は、山岳観光道路磐梯吾妻スカイラインの沿線、秘湯幕川温泉から歩いて20分ほどの所であり、30メートルほどの崖壁を滑り落ちる光景は、まさに舞台の緞帳を思わせるような見事な滝です。

本滝の存在する、いわゆる吾妻山周辺国有林は、平成7年2月に、森林生態系保護地域に指定してお

り、そのバッファゾーン整備事業として、3つの登山道整備が平成10年に完了し、天然林の新緑や紅葉を楽しみながら、雄大な幕滝を回るルートが人気となっています。

福島森林管理署では、登山道整備後、この幕滝周辺を自然観察教育林の「きぼっこ森」とあわせて森林レクリエーションを通じた森林の情報発信基地としてとらえ、毎年「幕滝周辺の森林観察会」を開催しており、本年も10月に実施を

予定しています。

福島を訪れる機会がありましたら、是非一度温泉を楽しみながらこの幕滝をご覧頂きたいと紹介いたしました。

(福島署 広報連絡官 吉野和久)

発行所 関東森林管理局  
編集 総務課

TEL(027)210-1158  
FAX(027)210-1159

